

# 史遊サロン通信

No. 253号  
平成28年  
7月5日

編集  
042-754-9360  
arai-hiroshi@  
jcom.home.ne.jp  
新井宏

## 「歴史の現場に立ち会える」 これこそ史遊の楽しみ

歴史に遊ぶ者にとって、「歴史の現場」に立ち会えることは、「大感激」である。

そんなに大袈裟なことを言っているわけではない。今日では誰でも、特段の資格も要せず、日々の世界のニュースを簡単に入手できるが、もしそれが自分だけに知らされたものであったら、どんなにか心が弾むことであろう。

一九八八年十一月九日。ベルリンの壁が崩壊した時、私の生きている内に、何とかその結末を見たいものだと思った。

こんな壮大な「歴史的な実験」について、私にも予測できる絶好な機会が与えられている。とにかく、自分の知る知識を総動員して、いくつかの予測をした。その予測結果がどうなるか、いわば私の歴史人生の評価を受ける

ような気持ちであったが、なかなか適わぬ夢だと思っていた。ところが、あつという間に、状況は決まってしまった。

今や東ドイツ出身の女性、メルケルがドイツを率いているばかりか、大経済圏EUの指導者である。

この数年、韓国の朴槿恵大統領の行動を危惧して種々なことを書きまくっていた。「努力逆転の法則」すなわち「エミール・クーリエの法則」を地で行くようなことばかりやっていて、韓国の政治経済、特に日韓関係を悪化させてきて、韓国は大損をした。

今日は、英国の国民投票で二年後のEU離脱が決まったニュースで激震が走っている。

今月の史遊サロンは予定通り第三土曜日の七月十六日です。会場は定例の銀座ルノール八重洲北口会議室。史遊サロンに紹介された話題やニュースなどを楽しみましょう。  
なお、九月の史遊サロンも予定通りの第三土曜日の九月十七日です。

世界の繁栄は、精緻に仕組まれた構造物のようであり、ねじが一本抜けただけでも崩壊する脆弱さを持っている。いわば「粉飾決算的な繁栄」である。だから。世界のリーダーは叡智を集めて、必死に仕組みを守っているが、それに背を向けて、分かり易い「幼稚な正論」が勢いを増している。

トランプも似ているし、IS国家やアベノミクスにもその匂いを感じる。だからEUは英国に「どうぞご随意に」などと言えず、必死になつて、意地悪をするはずである。どんな結果になるか。こんな議論もサロンでは如何であろうか。

前回は、出席を予定していた森下さんと山本(鎮)さんが急に参加できなくなったが、合計十二名の方の参加があった。

ここまで、書いたところで、最終原稿を待った。近年は、ページ数に拘らず自由に書いて頂くようにしているので、全部の原稿が入らないと、編集が終わらない。

このページ、すなわち、巻頭の記事は、編集面から言えば、いわばページ数あわせの「埋め草」である。

原稿が揃ったところで、計算して見ると、今月分は、ちょうど九ページ分である。空白ページを避けるためには、一ページ削除するか、一ページ増やすかである。

迷わずに、書き足すことにする。

英国のEU脱退で真っ先に問われているのが、通貨の信用問題である。ポンドが下落するであろうことは素人でも判る。

ところで、通貨の信用度を示す指標は何であろうか。まず思い浮かぶのは国家や中央銀行通貨の信用度、すなわちソブリン格付であり、格付け会社三社（ムーディーズ・S&P・フィッチ）による成績表が簡単に利用できる。

それによると、AAA級の超優良国が、ドイツ、オランダ、スイス、デンマーク、スウェーデン、カナダ、米国など十一カ国、続くAA級が、英国、フランス、ベルギー、韓国、

中国など十二カ国、その後をやっとA級の日本やチェコ、ポーランドが現れているので、日本は五十カ国中の二十四位である。

単純に言えば、日本の通貨「円」の信用度はソブリン評価では著しく低い。国の負債がGDPの二倍にも達する世界一の借金国だから無理も無い。

ところが、英国のEU脱退によって、「円」はますます痛恨の「最強通貨」になっているという。痛恨という以上、日本にとって最悪の事態である。アベノミクスが何を置いても円安を推進したかったのであるから、これも良く判る。

しかし「幼稚な正論」から言えば、円の価値が上がれば、国民がみんな喜ぶはずである。事実、英国はポンド価値が二十%も下がると大騒ぎしているではないか。日本の国民だって、資産や給料をドルで表示して受取れば、国際基準では大もうけである。

その上、ソブリン格付で劣等生の日本円が、ますます最強の通貨になるとは何事か。

もちろん、こんな「不可解な現象」については、うんざりするほど多くの解説がある。

ところが、それらの解説のほとんどが、円高や円安により、何が起り、だれが儲け、だ

れが損するかと言う視点を欠いている。どうやら、わかっているながら曖昧にしているのではないかと思われる。

しかしサラリーマンなら誰もが経験しているはずだ。上司が「幼稚な正論」を振りかざして迫る時、だれでもそれに反論できなかった経験があるはずだ。

「幼稚な正論」は、その利害関係に合っているグループには、素晴らしく力強いが、それが運悪くポピュリズムに乗って力を持ち過ぎると、ナチスやイスラム原理主義に至る。

宗教やイズムには「幼稚な正論」を純粹培養した面がある。だから、それが暴走すると、「正義と正義」の戦いになり、悲劇にいたる。

世界の歴史には、王莽、王安石、毛沢東などの他にも、松平定信の「寛政の改革」、水野忠邦の「天保の改革」など理想に燃えた改革が無数にあった。しかしそれらは全て「幼稚な正論」が先鋭化した惨めな結果であった。

「埋め草」なのでこの辺で終わりにする。

ただ、編集をやっていると「埋め草」を豊富に持つと豊かな気持ちになれる。投稿をまつ。

(新井宏)

## 誠忠の茶園

太田精一著

# 誠忠の茶園

―牧之原の荒地に挑んだ幕臣たち―

刀を鋤に替えた幕府精鋭隊

太田精一著



会員の太田精一さんが『誠忠の茶園』を上梓された。今回は幕末明治に題材を採った二百一十二頁の長編。

史遊サロンでもご紹介があると思うが、内容については「あとがき」に良く纏まっているので、そのまま転載する。

### あとがき

嘉永六年(一八六三)、浦賀沖に停泊したペリ―は、日本に開国を迫った。

太平の夢をさまされた日本は、開国か攘夷かを巡って世論が沸騰し、徳川幕府を震撼させた。

幕臣の間でも、開国派と攘夷派に分かれ激論が戦わされた。

開国派には、大久保一翁、勝海舟、川路聖謨、

岩瀬忠震などがいて、攘夷派には、山岡鉄舟、高橋泥舟、本編の主人公である中條景昭、大草高重、今井信郎を始めとする幕府講武所の教授たちがいた。

開国派は、西欧の知識を学んだ開明的な幕臣たち、攘夷派は武力によって、外国の脅威を取り除こうとする保守的な幕臣たちが中心となっていた。

しかし、攘夷派幕臣たちも薩英戦争、四国艦隊下関砲撃事件など西欧列強の強大な軍力を目の当たりにし、攘夷が困難なことを覚悟し、次第に開国やむなしとの方向に傾いて行く。

慶応三年(一八六七) 十五代将軍徳川慶喜は、大政奉還を決意。政権を朝廷に返上することにより、政治的混乱を避けようとした。だが、薩長を中心とする西国雄藩にとって、新政府を創設するには、徳川家は邪魔ではない。そこで、朝廷を味方につけ、錦の御旗を押し立てて東征軍を編成、徳川家の滅亡を図った。

慶喜は、ひたすら恭順を続けることにより東征軍の武力攻撃を回避し、徳川家の存続を願った。かつて攘夷派であった中條景昭、大草高重らは、精鋭隊を組織し、慶喜の護衛に

当り、勝海舟、大久保一翁などと手を携えて徳川家の存続に腐心した。

当主である慶喜の命を守ることが、徳川家の存続に繋がると考えたからである。

その結果、慶喜の命が保障され、徳川家の存続が認められた。だが、四百万石の所領が、七十万石に減封され、駿府への転封となった。駿府(静岡)への移転とともに徳川家当主は、慶喜から家達に変わった。

減封により、これまでの家臣団を抱える余裕が無くなったため、藩は帰農を奨励した。

幸い牧之原(現静岡県島田市)に、未開墾の広大な徳川家の所領があったので、その土地を慶喜の護衛に当たった精鋭隊の面々に下げ渡した。

こうして、中條、大草の率いる精鋭隊の旧幕臣たちは、剣を鋤に替え、同地の開墾を行うことになったのである。だが、台地であるため、水田耕作は困難である。そこで、畑地でも可能な商品作物を栽培する必要が生じた。勝海舟は、茶の栽培に目を付け、入植者たちにそれを勧めた。

茶は当時、生糸と共に日本の重要な輸出品であり、横浜港からも出荷されている。牧之原の土壌は、幸いにして茶の栽培に適してい

たため、生産量は増加し、次第に栽培面積も拡大した。

だが、開墾には、多大な労力を必要とするため、慣れない農作業に挫折する者も続出した。

また、周辺の農民との水利権争い、彰義隊士の入植に伴う幕臣同士の軋轢、入植者たちで組織した金融機関内での使い込み事件など多くの障害に直面した。だが、入植した旧幕臣たちは、お互いに助け合い協力し合って、困難を乗り越え開墾を進めて来た。

その苦闘の歴史の積み重ねによって、今や牧之原は、全国一の生産量を誇る茶処となり、今日の繁栄を築くことが出来たのである。

幕末から明治にかけての激動の時代に、崩壊する幕府の中にあつて、牧之原入植の幕臣たちが何を考え、どう行動したか。新時代の到来をどのように受けとめ対応したか。

明治維新の裏面で、苦闘した旧幕臣たちの歴史を語ることは、グローバル化という名の第二の開国に伴い、その奔流に押し流されそうな人たちが、新しい道を模索する上で、参考になるかもしれないという思いで筆を執った次第である。

本作品は、同人誌「まんじ」113号(平成二十一年八月発行)から123号(平成二十四年二月発行)まで120号を除き十回にわたり連載した物語を取りまとめ、訂正加筆したものです。

執筆に当って静岡県島田市の初倉郷土研究会塚本昭一会長には、多数の著書及び資料のご提供とご助言を頂き、加えて牧之原開拓幕臣子孫の会大草省吾会長にもご協力を賜りましたのでここに改めて感謝申し上げます。

また、単行本としての取りまとめに当っては、「まんじ」及び「史遊サロン」でご厚誼頂いております新井宏氏に多大なご尽力を賜りましたことを厚くお礼を申し上げます。

## 一 勝海舟の実務の師

幕末遠国奉行 川村精兵衛修就あがたか

諸橋 奏

一六〇三年(慶長八)、徳川家康が征夷大將軍となり開いた江戸幕府は、百年を経過した十八世紀初頭になると、年貢の徴収高は停滞し武士階級の生活は困窮、また経済発展は農民の離農を余儀なくするに至った。

この幕府の窮地打開を目ざして行われたのが、享保・寛政・天保の三大改革である。

八代將軍徳川吉宗が断行した「享保の改革(一七一六〜四五年)」では財政は安定し、幕府の権威は回復した。

吉宗路線を継いだ老中兼側用人の田沼意次(在職一七六七〜八六年)は財政改革には成功するが、天明飢饉・農民一揆、更には譜代門閥派との軋轢などにより失脚する。

代って老中松平定信の「寛政の改革(一七八七〜九三年)」は時代の流れもつかめず、改革の効果はあがらなかった。

定信に代って実権を握った十一代將軍徳川家斉いえなりは一七八七年(天明七)まで五十年間その座にあり、更に一八四一年(天保十二)六十九歳で死去するまで大御所として強い影響力を

もっていた。しかもこの間、五十五人(成人二十八人)の子女をもうけ、奢侈な生活を送り、幕政を混乱させ、幕勢降下に拍車を掛けた。

その最たるものが「三方領地替」であった。一八四〇年(天保十一)十一月一日、幕府は突如、武蔵川越藩主松平斉典なりつね(家斉の五十三番目の子、斉省なりやすを養子に貰った)十五万石を出羽庄内に、庄内藩主酒井忠器ただかた十四万石を越後長岡に、長岡藩主牧野忠雅(京都所司代職)七万四千石を川越に移す、大名の転封を発令した。この移封令の発端は斉典の庄内への所替え願いを家斉がわが子かわいさから認めたことにあった。しかしこの譜代三藩領地替えは庄内領民の激しく大規模な反対運動に発展した。

(藤沢周平『義民が駆ける』参照)

一八四一年一月三十日、当「三方領地替事件」の発端である家斉が没した。(実は一月七日没)

偶、同一月七日、老中水野忠邦は、佐渡奉行川路聖謨かわじとしあきにアヘン戦争について「イギリス軍艦が清国の一部を奪取したとのこと、日本の戒めと成るべき事で湾防備策」急務、と報告している。阿片戦争(一八四〇〜四二年)について幕府は、前年一八四〇年の七月、オランダ商館長から長崎奉行に提出された「風説書」ですでに承知しており、一八四二年(天保十

三)七月二十四日、さきに発令した一八二五年(文政八)の異国船打払令を改め、外国船薪水給与令を布告している。

実権者徳川家斉の死により、以後幕政は將軍徳川家慶の厚い信任のもと、老中首座水野忠邦による威権が行われることとなり、一八四一年五月二十二日「天保の改革(一八四一〜四三年)」が始まる。

一八四一年七月十二日、家斉時代に発令された「三方領地替」は改革遂行を優先し中止となる。(三方領地替反対一揆)

翌四二年十月十四日、近江の幕領で新開地を検地しようとしたところ、大一揆がおこり、検地の実施を中止する。(三上山検地反対一揆)

一八四三年(天保十四)六月十一日、越後長岡藩(藩主京都所司代牧野忠雅、十一月三日老中となる)に新潟浜村六〇八名の上地を命じ、十七日新潟奉行所を設置、勘定吟味役川村修就が初代奉行となる。(新潟上知)

更に九月十八日、江戸・大坂の十里四方の私領を没収して幕府の直轄領とする「上知令」を発令したが、御三家・幕閣はじめ広汎な反対運動で、閏九月七日撤回に追いこまれた。そして閏九月十三日、老中水野忠邦は「国政

の事不正の趣あるによつて「罷免となる。(翌一八四四年六月二十日再び老中上座に)

結局水野忠邦が断行した天保の改革はその専制化を反発されて失敗、反つて幕府の最も基本的な権力である領地権転封権の衰退を天下に露呈する結果となつた。

一方、その老中水野忠邦から「北海防禦・新潟町防禦」という折からの重大な特命を受けて初代新潟奉行に任命された川村修就は、九月十六日付文書で忠邦に職務遂行上の諸願いを提出し、閏九月二十八日江戸を出立、十月九日新潟仮御役所に到着する。そして忠邦失脚後指示一つもない幕閣・重職の海防に対する認識の欠如・無知さに愛想を尽かしながらも修就は、着任の翌日から御庭番時代に体得した管理手法を活かして行動を開始する。

その日新潟町は相憎の大風雪であつたが、早朝に責め馬(馬を乗り慣らすこと)と称して、海岸配置の異国船見張番所を抜き打ち視察したという。その後の職務精励ぶりを伺わせるエピソードである。

川村修就は「御庭番家筋」の旗本の出自であつた。この役職のはじまりは、紀州藩第五代藩主徳川吉宗が第八代將軍(在職一七二六〜一七四五)を継承の折、紀州藩時代と同役を果たさせるべく十七名を幕臣団に編入したこ

とにある。当一統は代々御庭番任用と決つており「御庭番筋の者」と呼ばれていた。役目は將軍直屬監察機関で、修就は別家川村分家の二代目であつた。

序でに付記すると、新設「新潟奉行」は、「遠国奉行」といわれる重要直轄地へ派遣され、將軍に代つて支配権(行政権はじめ、治安維持・裁判・徴税・処刑など)を一手に掌握している高級官僚の役職。

その川村修就初代新潟奉行が新潟へ着任した一八四三年(天保十四)十月九日(転任命令で新潟を出立する一八五二年(嘉永五)七月十八日までの九年間「一八四四年(天保十四)十二月二日弘化と改元、更に一八四八年(弘化五)二月二十八日嘉永と改元」の事績を列挙すると

將軍(幕府)水野越前守忠邦に命じられた任務は「北海防禦の御主意(將軍の意向)」の至上命令であり、それはまた「新潟町防禦」ということであつた。その使命遂行のためには「民生の安定なしには異国の侵攻防禦もできない」というのが修就の基本的な考えであつた

#### 一 北海防禦(海防)の対応準備

#### ○新潟奉行所の開設

組織Ⅱ奉行・組頭(二人)・配下(七十八人)・水主(四十人)

○奉行以下全員の役宅建設

○砲術訓練

着任早々に始め、翌年八月には大筒発射が出来るまでに上達。

○大筒の地元鑄造

○御備場築上

御台場・敵見・御番所・常灯・武器蔵・火薬蔵・供待。

○異国船襲来想定訓練

小舟偵察と連絡方法・近隣諸藩への連絡網の構築・配下、町人の役割配置。

最終的には三貫目玉大砲まで揃え、信濃川河口の洲崎番所付近までずらりと据え付け、行き通う船人を驚かせ、頼もしがらせたという。

二 民生安定のための諸施策

○砂防植林

一八四四年(天保十四)春着手。砂防林松を「御松」と呼称方指示、黒松苗三千本植林を手始めに、一八四九年(嘉永二)には計三万六千十四本にまでした。

○開墾

砂防の結果、七十町歩の畑を創出。

○消防

何よりも恐いものが「火事」であるとの認識のもと、着任するや十三ヶ条の「火の元掟」を布告「火の用心」精神の徹底を図り、火事場には馬で駆けつけ自ら指示を。

○俟約の奨励  
一八四四年二月、華美衣服の着用・高価菓子  
子の売買を禁止し、在任中厳しい監視を続けた。

○物価対策  
着任の一八四三年十二月、まず物価を引き上げないよう触れを出し、四五年(弘化二)九月、米相場引上げ禁止を、更に四九年(嘉永二)十一月には米の買い占め禁止を命じた。一方で翌五十年八月、米高価のため、窮民に救助米を支給、五十一年九月には、再度の米相場引上げ禁止するなど、常に町民の暮らしの向上に尽力。

○風紀肅正  
港町特有な風紀肅正のため、着任の一八四三年十二月、男女混浴・町人肩衣着用を禁止。四四年(天保十五)九月以降、遊女屋を「朱引き」し、「泊茶屋・茶汲女」・「船宿・洗濯女」の呼称に。また一八四七年(弘化四)三月には諸寺院へ風俗取締り触れ書を。以上の如く御庭番で内々遠国御用七度も勤めてさまざまな民情を知り尽した修就ならで

はの木目細かい施策で新潟町民の心を捉えた。新潟では現在でも修就を「大砲奉行」の異名で、その名に思いを籠めて徳を偲んでいる。

所で、修就は新潟奉行九年の間、一度も江戸に帰郷することなく職務に精励したが、目的の異国船はついに近海には現われ仕舞いであつた。

一八五二年(嘉永五)修就は新潟奉行の任を終え帰府。七月、続いて堺奉行に任じられ赴任。五十八歳の時である。

一八五三年(嘉永六)六月三日、アメリカ東インド艦隊司令官ペリー、浦賀に來航。対応に苦慮した老中阿部正弘が広く意見を求めた時、勝海舟は意見書「軍制改革と人材育成、人物本位の登用、江戸湾の台場設置、沿岸防備体制の強化、軍艦の調達など」を提出。

翌五四年、ペリー再来航し、幕府は三月三日、日米和親条約十二条を締結する。

五月二十日、修就、大坂西奉行に任じられ、堺から直行。

一八五五年(安政二)一月十九日、海防掛目付大久保忠寛(一翁)の推挙で、勝海舟、蕃書翻訳御用出役を命じられる。

二月、一翁は蕃書調書に出仕したばかりの海舟を折からの「攝海巡見(大坂湾防備体制検討現地調査団)」に大御番格海防掛勝麟太郎と

して一員に加えて連れていき、二週間ほど実地検分、近傍海岸巡視、御台場築造論議を体験させた。この時に同行したのが、大坂西奉行川村修就であつた。以後、修就と海舟の縁が続くこととなる。海舟の長崎海軍伝習所(一八五五年七月二十九日〜一八五九年一月十五日)時代、修就は長崎奉行(一八五五年五月一日〜翌年帰府)であり、海舟が一八六三年(文久三)に攝海砲台築造命を受けた時の大坂東町奉行は修就であつた。この間、海舟の「海防意見書」の学問知識は、修就の新潟奉行九年の実務知識を吸収して、鬼に金棒の知識力に変質していった。而も幕閣・重職の海防について無知に失望してしまっていた折に得た憂国の同志に修就は出来る限りの協力を惜しまなかつたと思われる。

因みに川村修就は一七九五年(寛政七)生れ、大久保一翁は一八一七年(文化十四)生れ、勝海舟は一八二三年(文政六)生れで、海舟は修就と二十八歳、一翁とは六歳の年令差があり、海舟にとって修就は名実ともに師であつたし、一翁は兄弟子であつた。そしてこの幕末における「開明的知識」三人の知識力は、気鋭の海舟に集約されて維新動乱期を乗り切る力になるのである。

その頃の自分について海舟は『氷川清話』で「当時私は未だ台場の事はよく知らざりしが、洋学者という廉をもつて、安政二年に大坂以西の海岸に台場を築造するため、見分として出張を命ぜられ、(中略)台場は西洋の弾丸を受けるために築くものであるから、(中略)段々書物の上で研究して、漸く攻城砲、野戦砲、海岸砲の区別を解するやうになつて、云々」と記している。

また同『清話』の中で、師、川村修就について海舟は「幕府には、三河武士の美風を受け正直な善い士があつた」として小栗上野ら四人の名をあげ、「川村対馬などはよい人物だった」と海舟流の精一杯の称賛をしている。まま兎に角、幕末における開明的知識人の最先端において、「海防」という「西洋列強の侵攻から日本を守る事が急務」を、その信条とした三人の同志の知力の具現化を担つた海舟は以後、「的”を海軍創設に絞り推進するが、その最大の所産が世界の革命史上類を見ない「江戸城の無血開城(一八六八年四月十一日)」であつたといえる。そして海舟はこの特筆に値する成果の力の源が何処にあつたかをよく承知していたのである。

義に厚い海舟は、己にその道を開いてくれた兄弟子であり、戦友であつた大久保一翁に

ついては、その長男大久保三郎を川村修就の孫、川村清雄ら五人と一八七一年(明治四)徳川家派遣留学生として留学させた。三郎は期待通り帰国後、東京帝国大学、東京高等師範学校教授を歴任する一廉の人物に成長した。そして、幕末・維新の立役者に自分を育ててくれた川村修就に対しては、川村家の家督を継いだ一八二四年(文政七)閏八月二十八日生れ(海舟の一歳下)の次男川村帰元(修正)の長男清雄(修寛)すなわち大恩人の孫に義を返すのである。

川村清雄について広辞苑は「洋画家。江戸生れ。川上冬崖に師事、仏・伊両国に赴く。(一八五二〜一九三四)」と記している。

清雄は一八六八年(明治元〓慶応四)十七歳で、父帰元隠居により家督を継ぎ、一八七一年、徳川家派遣留学生五名の一人として留学、まずアメリカに、その後フランスとイタリアにと都合十年余留学生生活を送り、一八八一年(明治十四)大蔵省印刷局よりの帰国命令で帰国。この間の一八七八年(明治十一)に敬愛していた祖父修就は八十四歳で死去。帰国翌年の一月、大蔵省印刷局彫刻技手に任じられるが十一月に辞職、失職する。

翌八三年(明治十〓)清雄三十二歳。一月早々、勝海舟の周旋で、徳川家歴代將軍像の

制作を依頼されたのをはじまりに勝家にわが子並の庇護を受けることとなる。

海舟はその一月には早くも赤坂氷川の自邸内に清雄のための画室を建てて画業を支援するのである。その作製に協力し、我が子のように可愛がり、衣食の面倒まで見てやる関係は清雄が一八九四年(明治二十七)に勝邸を出るまで、十年以上も続いた。「我が子のように」を語る清雄の談話、「勝さんが鼻屑にして呉れた事は、逢ひますと突然小言で、居ないてえと非常に褒めるのです。床の間にも居間にも他の物は懸けないで私の物だけを懸けて下さるんで、其の御恩は言葉に尽くされないので、(中略)其れで先生は何処までも外面から助けて下さって内部は奥さんが先生の着物の古いのを直したり或は新しい物を私に着せて下さったんです、奥さんが戯れに「此れは妾の隠し子で斯様に大きくなりましたから引き取りました」ッて言われる位で実に信切にして下さったのは今日も有難い事と思つて居ります」(『維新の洋画家 川村清雄』)

この清雄に対する勝夫妻のつくし方から、海舟が修就から受けたものがいかに深大であつたかを窺い知ることが出来るのである。

そんな維新の洋画家・川村清雄が、めざしたのは「日本人としての日本の洋画、和魂洋



才」の絵画であった。その作品には「勝海舟肖像画(左手に大刀を持つ上半身図、紙・鉛筆)」、有名な「江戸城明渡の帰途(勝海舟江戸開城図)(カンバス・油絵)」、「徳川吉宗像(板・油彩)」、「天璋院像(板・油彩)」、「形見の直垂(カンバス、油彩)」などがある。

〈主なる参考文献〉

『氷川清話』勝海舟 江藤淳・松浦玲編、講談社学術文庫

『維新の洋画家川村清雄』編集・発行東京都江戸東京博物館・静岡県立美術館、読売新聞社

『義民が駆ける』藤沢周平、講談社

『シリーズ藩物語、長岡藩』稲川明雄、現代書館

『大砲奉行』小松重男作・演出、「大砲奉行」上演実行委員会

『幕末遠国奉行の日記』小松重男、中央公論社

『藤沢周平の世界、義民が駆ける』編集人／向井香、朝日新聞社

## 東京湾と北米の鉛汚染相関論

高橋正彦

歴史的な現象には、時や場所、項目が異なっても、偶然に良く似た現象が現れることがしばしばある。

近年、遺物や堆積物のサンプル分析をして、産地や時代、用途などを推定する研究が盛んであるが、その中に鉛同位体比の分析がある。

鉛は不思議な元素で、質量の異なる四種類の同位体で構成されていて、その比率は金属、ガラス、木材など物質によって微妙に異なるが、地域、鉱山や製作地などで特有な組成を持ち、時には、指紋やDNAのように類似性を評価するのに極めて有効な方法となる。

私は、今、鉛同位体比の資料解析に夢中になっている。この分野における専門家の数が少なく、時には大ヒットを飛ばせる可能性があるからである。

この件に関して、五月の例会でちよつと紹介した。

過去約百年間、北米沖パーミューダと東京湾の堆積物の鉛同位体比の経時的な挙動が、極めて良く似ているのである。これが単なる

偶然であろうか。そこでひとつの試案を出した。

それは、第一次世界大戦の頃、世界的に亜鉛鉱山の開発ブームがあり、一時的に、亜鉛鉱山特有の鉛同位体比が汚染物質の中心を占めたのではないかと、また一九七〇年代には、ガソリンへの鉛添加が禁止され、その影響で、ガソリン添加の鉛の影響が急激に減少したのではないかと。

ところが、新井さんからは、第一次大戦の頃、東京湾では亜鉛精錬による鉛汚染はなかったのではないかと指摘を受けた。

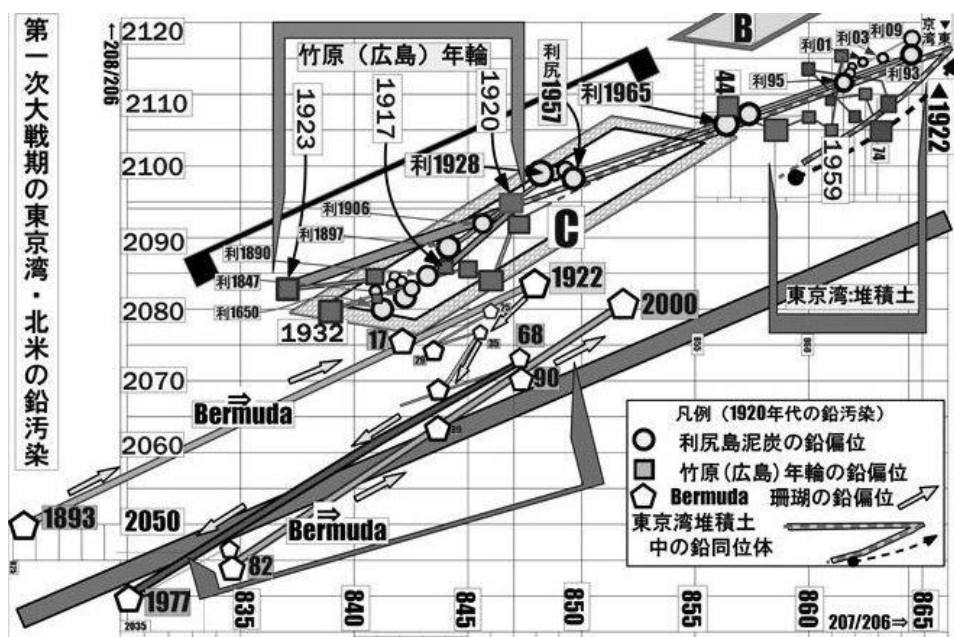
さあ、困った。どうやら、東京湾の鉛汚染は火力発電の石炭焙焼に限られていたようだ。ところが、それから三日後に、広島島の竹原にある亜鉛鉱山の影響を受けた木材年輪中の鉛同位体比のデータがパーミューダのデータとそっくりなことを見つけた。これで、再び同じ論旨に戻って議論できる。

実は、私の主張したいことは、もつともつと多岐にわたる複雑なことなのであるが、世話人の新井さんからは、これ以上、難しい内容は、『史遊サロン通信』ではなく、専門学会誌に送るように言われた。

それはその通りであるが、専門誌は、とても保守的で、こんな論考をなかなか載せてく

れない。ただし新井さんは、分かり易い内容に書き換えれば、よるこんで掲載するとう。場合によっては書き直しの手伝いもして良いと云う。

そこで、もう一度、気を取り直して、説明してみたい。



新井さんに指摘されたのは、「鉛汚染」と云えば、誰でも「量的な問題」と理解するが、高橋さんの論考は、「量的」なものではなく、鉛同位体比が示す鉛の「質的」な変化を対象としているらしい。ところが、その説明が完全に抜けているため、まず大部分の者は、入口で判らなくなってしまった。これでは、誰も判らないし、興味も持てない。

そこで、説明を「第一次大戦期の東京湾・北米の鉛汚染」の図に絞って再び試みる。

この図は、縦軸に鉛二〇八対鉛二〇六、横軸に鉛二〇七対鉛二〇六の鉛同位体比を採っている。鉛同位体比を用いた研究では最も一般的な方式であり、鉛の「質的」な変化を追いかけるのにも好都合である。

本来の図はカラーであるが、モノクロなので判りづらい。そのため、図中に大きく楔形で三カ所を括った。①バーミューダ、②東京湾(堆積土)、③竹原(広島)年輪、である。

五月の例会で説明しようとしたのは、①のバーミューダと②の東京湾(堆積土)のパターンの類似性である。バーミューダでは一八九二年には左下に分布していたのが一九二二年には一気に右上にシフトし、その後は一九二七年にかけて左下に戻っている。一方、②の

東京湾では一八八七年の左下から一九二二年の右上にシフトし、一九二七年には再び左下に下がっている。パターンは非常に良く似ている。私は、その原因を第一次世界大戦の時に盛行した亜鉛精錬に求めたが、東京湾に亜鉛精錬所はなく、その数値から亜鉛精錬の鉛同位体比を推定するのも確かに難しい。

そこで③の竹原(広島)の木材年輪に残された鉛同位体比のデータに注目した。竹原には付近に亜鉛精錬所があるからである。そして、竹原の年輪資料にも一九二〇年頃に右上に急激にシフトしているデータを見出した。

ここまで、説明するだけでも大変である。その上、「それで何が言いたいの」と問い返されるかも知れない。

実は、このような報告をする目的は、サロン通信二五一号にも書いたように、「科学論文データの信憑性」について、資料の相関性を通じて、論陣を張りたいからである。秘められた資料に相関性が見つければ、それを基にして「科学論文のデータの信憑性」を批判できる。それが真の目的であるが、今回はこの辺で止める。